

## 2. “いなみ野” 台地の開発の歴史



稲作の始まりから、“いなみ野” 台地の開発、干ばつ、水争いなど、淡河川・山田川疏水開発にたどりつくまでの前史についてご紹介します。

東西約 20km、南北約 15km という広大な“いなみ野” 台地の開発の歴史は古く、稲作が行われるようになった弥生時代に始まったといわれています。しかし、“いなみ野” 台地の中で、早くより開発されたのは加古川左岸の一带や大久保付近の低地などの台地周辺部であり、台地全体からみればほんの一部分でした。

“いなみ野” 台地の大部分は、近世になるまで荒野のままに放置されていましたが、古墳時代以降に大陸から伝わった土木技術に加え、戦国時代から発達してきた築城や鉱山採掘などの技術が、用水路の開削やため池の築造にも活かされるようになりました。江戸時代の新田開発では、台地周辺の河川（加古川や明石川）や台地上の中小河川（草谷川や曇川）を水源とする新井用水・林崎用水（掘割）・大溝用水・寺田用水に代表される用水路が整備されました。これらの用水はいずれも取水期間が制限されていたので、取水した水を貯えておくためにため池が数多く造られました。

“いなみ野” 台地の新田開発が一通り達成された 1710 年ごろを境に、年貢の増大や農業生産の拡大などで水利用が増加したのに加え、干ばつによる凶作・飢饉によって、水争いが頻繁に起こるようになりました。これが、台地から遠く離れた淡河川や山田川を水源とする疏水の計画に踏み出すきっかけとなっていきます。

## 2. “いなみ野” 台地の開発の歴史

(1) <sup>かんがい</sup> 灌漑技術の発展と新田開発

【古墳時代から平安時代頃（3～9世紀）】

加古川下流沿いの地域は、古くは弥生時代から古墳時代にかけて、加古川の旧河道や曇川くもりがわからの引水により小規模な水田が開発されていました。こうした稲作の発達は、加古川左岸の“いなみ野”を望む丘陵に位置する西条古墳群さいじょうの形成にもつながったと思われます。

7世紀に入ると、聖徳太子に由来する五ヶ井堰が築造されたと伝えられています。また、644年（皇極3）には、大和国官中の藤原弥吉四郎によって開墾が行われ、これらが“いなみ野”台地における開発の始まりといわれています。以降、岡の大池（天満大池の原型 675年（白鳳3））、入之池（現在の入ヶ池 714年（和銅7））などが築造されています。こうしたため池は、台地上の「流」（小河川）のよいところで、谷を堰き止めて造ったものでした。

平安時代、経の池（806年（大同元））、駅ヶ池（836年（承和3））、寺田池（893年（寛平5））の築造の記録が残っていますが、いずれの開発も“いなみ野”台地の周縁部に限られたものでした。

●五ヶ井堰

聖徳太子由来の取水施設で、北条之庄、加古之庄、今福之庄、長田之庄、岸南之庄の5つの村の用水となり五ヶ井用水と呼ばれています。

【中世・戦国時代頃（10～16世紀）】

平安時代の末期から鎌倉、室町、安土桃山時代にかけては戦乱が相次ぎ、新たな開発は少なく、“いなみ野”台地でも、大きな水利改良や新田開発はほとんど見られません。

鎌倉時代、関東諸国では開墾や治水事業など、大いに成果を上げたとされていますが、当地域での記録はほとんどありません。16世紀中期に雁戸井開発や16世紀後期に上部井用水の開発の記録が残されています。

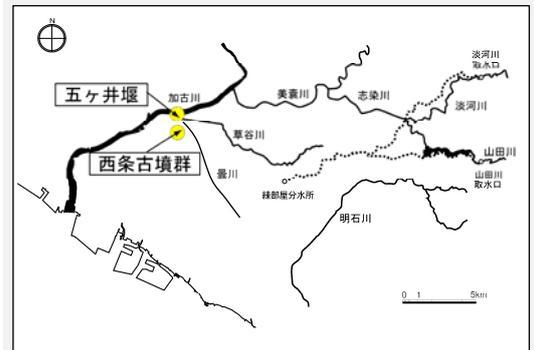


図10 西条古墳群、五ヶ井堰の位置図

流（りゅう）

この地方で“流”と呼ばれるため池の自己集水域は、局地的な湧水や地表水を水源としたものです。

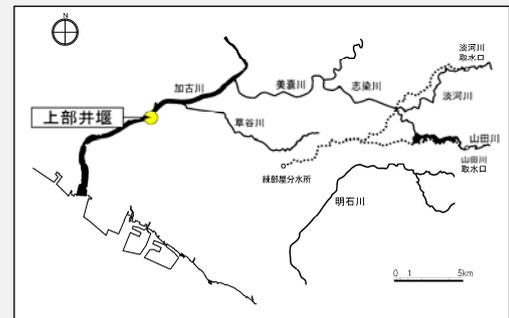


図11 上部井堰の位置図

### ●江戸時代の用水と新田開発

- 1625年 中一色新村の開拓
- 1655年 新井用水の開発
- 1658年 林崎用水と寺田用水の開発
- 1659年 加古新村と野際新村の開拓
- 1662年 国岡新村の開拓
- 1661-73年 幸竹新村の開拓
- 1680年 大溝用水の開発
- 1692年 野谷新村の開拓
- 1697年 蛸草新村の開拓
- 1712年 印南新村の開拓と相之山開墾

### 【江戸時代頃（17～18世紀）】

江戸時代になると様相が一変します。この時代に本格的な水利開発が進んだ理由としては、次のような点が挙げられます。

- ①戦国時代における土木技術の発展により、河川の上流部で分水し、水利に乏しかった台地に導水したことで、その地域の新田開発が進んだこと。
- ②地区間の利害対立が激しかったが、武家支配による強大な権力を背景にして水利調整が実施できるようになったこと。
- ③室町末期ごろからの郷村制や農村自治の発達にともなって農民上層を中心とした地域的な統合や水利支配が次第に進んだこと。

### ●非灌漑期の余水の活用

この時代には、河川から水を引き非灌漑期（10月から翌年の5月頃）の余水を引水するなどし、それをため池に貯留するという水利用の平準化の技術が確立されました。

このため、水の通年利用を可能とし、用水確保が比較的容易となり、17世紀に入ると“いなみ野”台地の新田開発が急増します。

この間、新井用水、林崎掘割、寺田用水、青野井用水、大溝用水など、現在も“いなみ野”台地を潤している用水路が次々と建設され、台地開発のひとつのピークとなりました。

“いなみ野”台地の東端に位置する神出・岩岡（神戸市西区）では、当時、水をあまり要しない葉タバコを中心に栽培されていました。ここでも、1671年（寛文11）には伊川谷掘割が築造され、ため池や新田の開発が進みました。

1712年（正徳2）、“いなみ野”台地の最深部、印南新村が開発されました。しかし、既に主な水源は利用つくされており、畑地のための開発でした。

表2 江戸時代に開発された主な新田

年代	地区（所在地）			
1603年 (慶長8) ～ 1700年 (元禄13)	竹谷新田	(尼崎市)	今北村長兵衛新田	(西宮市)
	尾崎村	(赤穂市)	東新田村蓬川新田	(西宮市)
	塩屋新田	(赤穂市)	西新田村惣新田	(西宮市)
	八兵衛新田	(小野市)	<b>野谷新村</b>	(稲美町)
	上福田村	(社町)	<b>和田新村</b>	(稲美町)
	米田・神吉村	(加古川市)	<b>寺田新田</b>	(加古川市)
	鳥羽新田	(明石市)	野辻新村	(加古川市)
	<b>松陰新田</b>	(明石市)	西谷新村	(加古川市)
	<b>国岡新村</b>	(稲美町)	上之台新開	(川西市)
	<b>加古新村</b>	(稲美町)	北古新田	(神戸市)
1701年 (元禄14) ～ 1800年 (寛政12)	伊佐新田	(八鹿町)	神出新田	(神戸市)
	味間村	(丹南町)	<b>幸竹新村</b>	(稲美町)
	中山新村	(加古川市)	<b>中一色新村</b>	(稲美町)
	<b>蛸草新村</b>	(稲美町)		
森田村	(明石市)			
1801年 (享保元) ～ 1867年 (慶応3)	沙場新田	(尼崎市)	庄助新田	(姫路市)
	高州新田	(尼崎市)	栄新田	(加古川市)
	初島新田	(尼崎市)	肥塚新田	(姫路市)
	<b>印南新村</b>	(稲美町)	河原新田	(社町)
	<b>蛸草相の山</b>	(稲美町)	西長尾新田	(川西市)
	青野原新田	(滝野町)	石場山北新開	(川西市)
	蛸子野新田	(滝野町)		
	福旬新田	(小野市)	中島新田	(姫路市)
	相生新田	(姫路市)	太々新田	(姫路市)
	浅野村	(北淡町)	平福三新田	(姫路市)
1867年 (慶応3)	敷地新田	(小野市)	刈屋新田	(御津町)
	大平新田	(姫路市)	惣造新田	(高砂市)
	勤兵衛新田	(姫路市)	近藤新田	(姫路市)
	蛸子野開墾	(滝野町)	大森新田	(姫路市)
	金沢新田	(加古川市)	小東野	(神戸市)
	辰己開墾	(今田町)	広野新田	(三木市)
鶴場新田	(姫路市)			

参考資料：兵庫のため池誌（太字は“いなみ野”台地に立地）



写真 新井用水



写真 林崎掘割



写真 寺田用水



写真 現在の加古大池

表3 江戸時代前期の水利開発の歴史

1656年	明暦2	新井用水の完成
1658年	万治元	林崎掘割の完成、寺田用水の完成
1659年	万治2	加古新村、野際新村の開発着手
1660年	万治3	加古大池の原型の開発
1661年	寛文元	幸竹新村の開発（僧、浄円）
1662年	寛文2	国岡新村の開発
1664年	寛文4	野々池、茨池、溝ヶ沢池、跡池の築造
1669年	寛文9	加古六大池の築造
1671年	寛文11	林崎掘割の拡幅延長工事、伊川谷掘割の完成
1672年	寛文12	高畑分水（寺田用水からの分水）
1674年	延宝2	伊佐堰の完成
1676年	延宝4	長府池、内ヶ池の築造
1680年	延宝8	大溝用水（加古の大溝）の完成
1681年	延宝9	上部井用水（新たに堰をもうけ、加古川から取水）
1692年	元禄5	野谷新村（母里地区：最上流の高台）の開発
1696年	元禄9	蛸草新村開発、水源となる広沢池、広谷池の築造
1707年	宝永4	大久保掘割（林崎掘割からの分水）の完成
1712年	正徳2	印南新村の開発

参考資料：HP 水土の礎

## 2. “いなみ野” 台地の開発の歴史

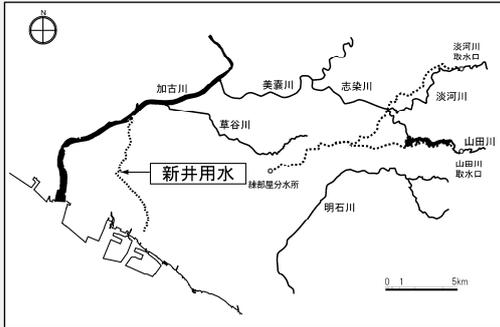


図12 新井用水の位置図

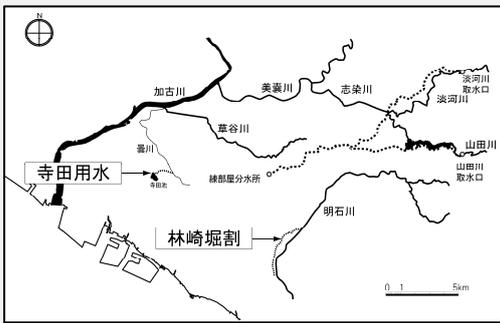


図13 林崎掘割・寺田用水の位置図

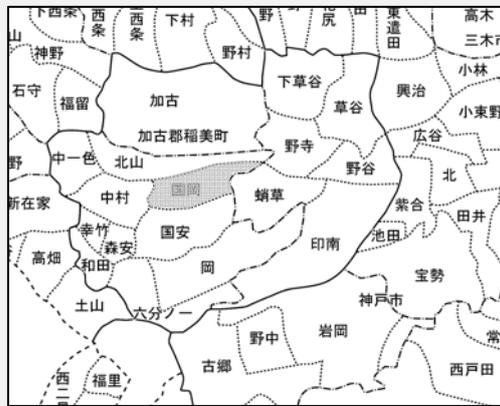


図14 国岡新村の位置

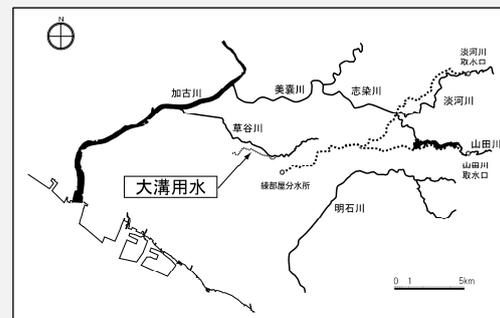


図15 大溝用水の位置図

### 1656年（明暦2）：新井用水の完成

新井用水は、<sup>しんゆ</sup>今里伝兵衛の発起によって1655年（明暦元）に着手され、翌年に完成した用水路です。新井用水は、<sup>いまだとでんべい</sup>五ヶ井用水から分水し、“いなみ野”台地の周辺を通りながら各地に給水し、播磨町の大池へつなぐ約14kmにおよぶ用水路です。加古川からの取水は「不定期」とあり、その高水や余水を分水したほか、非灌漑期には新設したため池に貯留しました。

### 1658年（万治元）：<sup>はやしざきほりわり</sup>林崎掘割と寺田用水の完成

林崎掘割は、明石川から分水し、用水不足に悩んでいた明石藩領の大久保台地を開発するために開削されたものです。林崎掘割では非灌漑期にあたる10月から翌年5月までの間に引水し、新設したため池に貯留しました。

寺田用水は、曇川から分水し、野口台地の南斜面を灌漑したものです。取水は新井用水と同じように「不定期」で、河川の高水や余水を取水し、さらにため池に貯留したものと考えられています。

### 1660年（万治3）：加古大池の原型の開発

加古新村の開発時に「五大池」（現在の加古大池）が築かれています。また、1669年（寛文9）には現在の茨池をはじめ三軒屋池、四軒屋池、六軒屋池、七軒屋池、八軒屋池が築かれました。

### 1662年（寛文2）：国岡新村の開発

加古新村に南接して国岡新村が開発されました。同村は、国安村の庄屋理平次と岡村の庄屋九郎兵衛の両人が先導したため、両村の頭文字を合せて国岡新村と命名されたと伝えられています。

### 1680年（延宝8）：大溝用水の完成

1680年（延宝8）には大溝用水（加古の大溝）が造られました。この加古の大溝は、草谷川の上流から分水し、

草谷村と野寺村を通り、流末は現在の加古大池や入ヶ池などに注ぎ、加古・国岡新村などの水源として利用されています。

### 1692年（元禄5）：野谷新村の開発

1692年（元禄5）には、台地深部で野谷新村が開発されました。これは野寺・草谷両村の庄屋による村請新田とみられ、両村から一字ずつを合わせて野谷新村と命名しています。



図16 野谷新村の位置

## （2）生産状況

畑作として栽培されたのは、綿・大豆・小豆・ささげ豆・きび・あわ・菜種・たばこ等でありましたが、最も重視されたのは綿でした。姫路藩は1804年（文化1）以来綿の生産を主産業とし、特に加古・印南地方に綿栽培を奨励しました。1818～1829年（文政1～12）には江戸における木綿の専売権を獲得したため、綿による収益が高く、水不足で稲作には不適な当地では、綿は米に匹敵する重要な換金作物となっていました。

表4 印南新村の作物構成の動き（夏作）

作物名	耕作地	寛政2年 (1790)		寛政12年 (1800)		文化元年 (1804)		文化10年 (1813)		文政2年 (1819)	
		町	反	町	反	町	反	町	反	町	反
稲	本田	0.1		0.1		0.1		0.1		0.1	
稲	畑田	4.3		4.3		4.8		4.8		4.8	
夏大豆	畑	49.3		15.6		2.3		0		0	
秋大豆	畑	6.6		9.3		14.1		17.2		25.9	
小豆	畑	23.8		48.7		33.9		41.9		42.9	
黍・大角豆	畑	25.1		35.4		35.6		35.1		34.5	
黍・ひえ	畑	15.3		16.3		22.3		19.4		15.8	
粟	畑	3.5		4.2		5.3		4.0		3.2	
たばこ	畑	19.2		12.4		14.1		10.1		2.2	
木綿	畑	22.9		32.8		35.5		35.0		38.3	
計		170.1		179.1		168.0		167.6		167.7	

※町≒ha

参考資料：稲美町史

**水争いとは**

生活や農業のために必要な水を求めて、水量を争うことです。特に雨の少ない年は、水を求めて近くの村同士で大きな争いがおき、人が死ぬこともありました。水論、水騒動とも言う。

**●野寺の水争い**

野寺の水争いの中で古い事件は入之池郷との間に起きている。寛文年間(1661~1672)、野寺の経之池の灌漑面積が増加したために用水不足となり、芦池より補給することにした。このため芦池下流の鬼河原に堤防を築いて、水量の確保を図った。ところが、入之池郷より百数十人押寄せてきて、この堤防を切り崩した。入之池の水源確保のためである。野寺と入之池郷とは繰り返し争いがあり、戸板で運ばれる怪我人も出した。延宝元年(1673)の手形は、入之池の鬼河原谷は幅1間、長さ700間であるが、芦池流のため300間だけ入之池郷が溝浚えすると規定した。この規定は現在まで守られている。

(大住新吉『野寺の水利史』)

**(3) 水争い**

1700年頃、ため池や用水路開発、新田開発が一通り終わり、その後大規模な水利改良や新田開発はみられませんでした。この頃を境に、姫路藩による年貢増強、干ばつなどによる凶作、豊作時における農産物価格の暴落などの社会不安を契機に、地区間の水利対立＝水争いが頻繁に見られるようになります。

**1621年(元和7)・1666年(寛文6): 手中流を巡る水争い**

記録に残る水争いは1621年(元和7)の手中流を巡る藩を越えた争いや1666年(寛文6)、神出庄と蛸草郷の争いがあげられます。明石藩に属する神出庄で新池と新溝(用水路)を造ったため、それらの下流である「手中の流」を用水としていた蛸草郷の6カ村(中村、森安、六分一、国安、北山村、岡村)が異議をとなえました。蛸草郷は姫路藩に属していたので明石藩との論争となりました。ついには幕府の京都奉行所の裁決によって、神出庄の新池・新溝は潰されてしまいました。

慢性的な水不足である“いなみ野”台地では、その後も用水を巡る対立、水争いは数多く起きることとなりました。

表5 享保～嘉永年間の飢饉と水争いの歴史

1722年	享保7	凶作、大飢饉
1732年	享保17	享保の大飢饉
1737年	元文2	蛸草郷と印南新村で水争い
1743年	寛保3	蛸草郷と印南新村で水争い
1749年	寛延2	姫路藩百姓一揆、野谷新村の伊左衛門らが首謀
1764年	明和元	草谷郷と山西新村(神出)の水争い
1766年	明和3	草谷郷と加古、国岡新村の水争い
1771年	明和8	神出東村何某、山田川疏水立案
1797年	寛政9	蛸草郷と草谷新村で水争い
1808年	文化5	草谷郷と勝成新村(神出)で水争い
1819年	文政2	草谷郷と興治新村(別所)で水争い
1826年	文政9	福田嘉左衛門(国岡新村)が山田川の引水を発起
1836年	天保7	天保の大飢饉
1851年	嘉永4	加古新村・国岡新村と草谷8ヶ村で水争い
1852年	嘉永5	蛸草郷と印南新村で水争い

### 1737 年（元文 2）：印南新村と蛸草郷で水争い

水利に苦しんでいた母里庄の印南新村が手中流を利用して新谷池を設けたところ蛸草郷の 6 カ村は姫路藩に上申して、この新池を廃止させました。

その後も、印南新村はため池の新設をしばしば郡奉行所に嘆願しましたが、これら 6 カ村の異議によって宿願は達せられませんでした。

### 1749 年（寛延 2）：姫路藩百姓一揆、野谷新村の伊左衛門らが首謀

野谷新村の組頭伊左衛門が首謀者となり、前年秋の台風によって、収穫が皆無に近いのに年貢は苛酷であるとして、まず上西条村の大庄屋沼田平九郎を襲いました。加古郡から 2 千人、印南郡から 3 千人が参加したといわれます。伊左衛門は大阪の牢獄で死亡しました。

しかし、この強訴を契機に姫路藩の全域に農民一揆が広がりました。これらの結果、首謀者の出た野谷新村では庄屋以下 50 余名、野寺村 3 人、加古新村 8 人、上西条 1 人、中西条 2 人、下西条 2 人、下村 1 人、石守 1 人が、それぞれ重罪に処せられました。

### 1851 年（嘉永 4）：加古新村・国岡新村と草谷 8 カ村で水争い

1851 年（嘉永 4）、加古新村及び国岡新村と草谷郷 8 カ村（草谷、下草谷、野村、下村、上西条、中西条、船町、野村新村）間に水争いが起きています。

ことの起こりは、草谷川から引水して加古大池や入ヶ池などに流す大溝用水を巡る紛争でありました。この争いは、草谷村、神出庄の広谷村に及び、姫路、明石両藩の境界地のため、両藩の役人まで出張して双方その可否を争いました。

結局、印南新村の大庄屋、沼田理平次、神野庄石守の大庄屋、石見儒之助の両名が仲裁して解決するに至り、その時の分境石は今もなお広谷、草谷の村界に現存し、当時を物語っています。

#### ●印南新村の苦悩

農業用水を巡る争いを繰り返しながら、“いなみ野” 台地の農業開発は徐々に進んで行きました。しばしば水不足に悩まされ、とりわけ最後に開発された印南新村は最たるもので、水利が最も困難な地であったといえます。

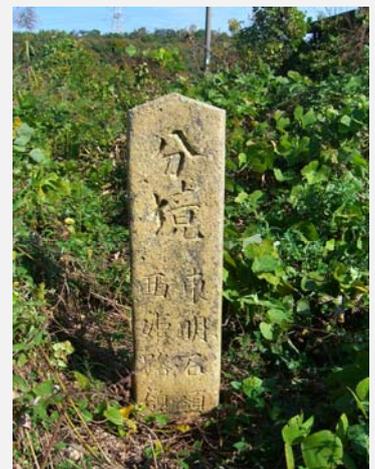


写真 分境石

### 凶作期の藩手当米

水争いが頻繁に起こるこうした実情から、姫路藩も年貢を低くするとともに、凶作期には手当米といえる藩米を支給するなどの保護政策を行なっていました。

記録に残る当時の藩手当米のうち、印南新村に関するものは下表のとおりです。当時の母里庄がいかにかいどい水不足地帯であったか、これをもって察することができます。史実に残る江戸末期 1859 年（安政 6）及び 1864 年（元治元）～1869 年（明治 2）にかけて続いた干ばつは非情の限りを持って地区一帯の農民を苦しめ抜き、村勢は衰退しました。

表 6 印南新村の藩手当米

年	米 額
1859 年（安政 6）	約 33 石
1864 年（元治）	約 34 石
1866 年（慶応 2）	約 17 石
1867 年（慶応 3）	約 30 石
1868 年（明治元）	約 30 石
1869 年（明治 2）	約 34 石 875 合
合 計	184 石 8 斗 7 升 5 合

1 石=10 斗≒150kg

参考資料：山田川疏水の陣痛